

お仕事ノンフィクション

自分がえらんだ はたらき方

1

好きをきわめてはたらく

お仕事ノンフィクション編集部・編



目次

好きをきわめてはたらく

◆ 技と心をみがく

けん玉師・伊藤佑介

3

◆ 飽くなき京都の魅力を探索する

京都観光アドバイザー・塩原直美

35

◆ つくって、つながる

オリイ研究所所長・吉藤オリイ

65

◆ 冒険を受けつぐ

北極冒険家・荻田泰永

95

技と心をみがく

けん玉師

伊藤佑介



ここは東京の西の方。多摩川のほとりのまち。けん玉師こと伊藤佑介さんは、今日もこのまちで、けん玉の練習をくり返す。

カン、カン、カン、カン……。

木でつくられたけん玉の、玉とさらがぶつかり合うその音は、今からおよそ百年前、大正時代から続く日本の伝統である。江戸のころ、このまちで剣の技をみがいた土方歳三は、けん玉の音を知るはずがない。

昭和、平成、令和の時代。伊藤さんは、伝統を受けつぐように、けん玉のうでをみがきつづけた。けん玉と向き合うことを、決してあきらめない。

「けん玉は日本文化」

「ケンダマシ?」

伊藤佑介さんがけん玉で有名になったのは、2000年代の初めのこ

とだ。そのころは、電話口でよく聞き返され、けん玉の伊藤と申します」と言いかえたこともあった。

けん玉は道具だ。その言い方はおかしいと、母親は言った。

けん玉パフォーマーでも、よかったのかもしれない。でも、その道をきわめたいという意味をこめて、言葉の最後に「師」を付け、日本的な肩書きを選んだ。

ショーでステージに立つときは、和装を身に着けるといっている。大正生まれのけん玉よりさらに歴史がある、江戸太神楽（獅子舞や曲芸など）の芸人の衣装を参考にした。けん玉師は、一生続けていきたいから、落ち着いた格好がちょうどいい。

浅草で羽織をつくったとき、胸元に伊藤家の家紋をあしらった。その日の気分で、むらさき色や黄色を着ることもあったが、今は地味な黒色がしっくりくる。

ショーのBGMには、津軽三味線の曲を使う。基本的には一人で演じるが、

「和音和技」というユニットでステージに立つこともある。

伊藤さんの新年は、けん玉で始まる。毎年、大みそかの夜はけん玉をして年を越し、新しい年をむかえる習慣がある。正月は、一年のなかでもっとも仕事が入る時期だ。年の初めがいそがしいのは、気持ちがいい。

けん玉の仕事は、もっぱらイベント会社や広告代理店から依頼を受けて行う。ゴールデンウィークや夏休みもよくイベントにまねかれ、それ以外の時期は、平日も忙しなく活動することが多い。イベント出演は、仕事全体の7割をしめる。

仕事を生むのは、縁をいただいたら、積極的に引き受ける。お声がかかれば、全国、海外までも、伊藤さんは、けん玉行脚に出かけていく。

けん玉道具を入れたトランクは、荷物と同じ落ち着いた黒地で、重さはお

よそ20キロ。ショーで使うおよそ10個のけん玉は、それぞれ、ゴロゴロとキャリーのタイヤを鳴らして引いていく。

会場への移動手段は、いつも電車だ。出演時間は決まっているから、開始の2時間前には現場に入る。めざす場所は、学校、ホール、企業、商業施設のもよおしもの、お祭り会場などである。

学校などの教育機関では、ショーとワークショップを合わせて、90分ほどステージに立つ。なかには、伊藤さんがけん玉に挑戦したり、観客がステージに上がってけん玉に挑戦したりする時間もある。演者と観客が一体になれるステージ構成だ。

また、企業の忘年会やクリスマスパーティー、地域のお祭りなどに呼ばれて演じるときは、ほとんどが30分のショーである。ときには、テレビなどのメディアに出演し、けん玉の技を教えることも仕事の一つだ。

日本をはなれて、海外に行くこともある。これまで、サウジアラビア、ブ

ラジル、スイスなど、およそ20か国を訪れた。おもに、大使館や国際交流基金といった国の機関、ホテルのショーなどで、なかには、あたえられた時間が5分間のこともあったという。

伊藤さんがショーで使うけん玉の多くは、遊び道具としてなじみのあるけん玉よりも、重さがある。玉の色は赤と白だ。赤は朱色に近く、この色合いも日本的な印象を意識している。

学校の体育館で、ぬけのある商業施設が会場のときは、糸が長いけん玉の技が見せどきの一つだ。高いところに上がり、一般的な糸の長さのけん玉と同じような動きで、会場がいちだんと盛り上がる。

いっぽうで、糸の短いけん玉もある。これは、けん玉が宙を舞う、ジャグリングのような見せかたで。また、ショーのなかで一瞬だけ登場する大きいけん玉と小さいけん玉は、客の笑いを誘う道具の一つだ。10本のけん玉をつなげた、10連けん玉は、なかなか難しい。しろうい。



の。けん玉を
に、おもに、あやつる。



◀持ちこぶトランクの中は、大小さまざまなけん玉がいっぱい。